

## 令和二年度荒魂之會八月例会資料

日時 八月二十二日（土）午後一時から午後三時迄  
会場 上野驛前茶房  
祭禮 新潟・謙信公祭  
出来事 東京の路面電車運轉開始  
人物生誕 辰野金吾 人物忌日 島崎藤村

七月の回顧（五名）  
佐藤 通次氏 平成 二年 七月 三日 三十一回忌  
岩崎 孝生氏 平成 六年 七月 七日 二十七回忌  
高橋 義孝氏 平成 七年 七月二十一日 二十六回忌  
江藤 淳氏 平成十一年 七月二十一日 二十二回忌  
鈴木 克則氏 平成十八年 七月二十四日 十五回忌

内容  
研究会 午後一時から午後三時迄

- (一) 古代歌謡の世界を読む 其の三、四  
『古今集遠鏡』本居宣長著 報告者 竹内  
『懐風藻』 報告者 小澤
- (二) 萬葉集輪讀
- (三) 日本書紀輪讀
- (四) 江戸武家事典輪讀
- (五) 偉人暦

## 古今集遠鏡

六冊。寛政五年（一七九三）頃成立。同九年刊行。

「遠鏡」とは望遠鏡のこと。実はこの前年、和泉國貝塚の岩橋善兵衛が、國産天體望遠鏡第一号を制作して、五年には京都で天體觀測會が開かれてゐる。岩橋の望遠鏡は、八稜筒で直径が二十四センチから二十七センチ。長さがその十倍と言う大きなもので、「阿蘭陀わたりの望遠鏡よりもよくみゆ。餘が家にも所持す」と橋南谿は『西遊記』の中で記している。ちなみに天體觀測會を主催したのも橋南谿である。「遠鏡」という書名がブームに乗つたものとは言へないまでも、このやうな時代風潮の中にあつたことは見逃してはならない。

さて本書は、『古今和歌集』の全歌（眞名序、長歌は除く）に、今の世の俗語（サトビゴト）、つまり口語譯、また補足的な注釋を添へた本。横井千秋の序文に「この遠鏡は、おのれはやくよりこひ聞えしまゝに、師のものしてあたへたまへるなり」とあるように。千秋のもつてで執筆した。譯は、てにをはに注意し、また言葉を補う場合はその箇所を明示し、嚴密な逐語譯となつていて、一見、初學者向きの入門書ではあるが、高い水準を保っている。『古今集』は宣長にとつて最も尊重する、また愛好した歌集であつた。

「古今集は、世もあがり、撰びも殊に精しければいとめでたくして、わるき歌はすくなし」（『うひ山ふみ』）。

新年の讀書始めも同集序を選んでいる。講釈も『源氏物語』や『萬葉集』と並んでその中軸となるもので、生涯に四度も行っている。一つの本の回数としては最高である。

本書は、『古今集』の眞名序、長歌を除く、假名序と短歌の全部を當時の口語で譯したものである。書名は、巻頭に「雲のゐるとほきこず多もとほかがみうつせばここにみねのみみち葉」と

二、例会豫定

九月（詳細未定）  
研究課題 『リグ・ヴェーダ』

十月（詳細未定）  
研究課題 『詩經・國風』

十一月（詳細未定）  
研究課題 『楚辭』

十二月（詳細未定）  
研究課題 『聖詠經（ニコライ譯の聖書・詩篇）』

ロ、會合催物案内

・三の丸尚藏館展覽會 第八十六回展「海と山のあひだー近代日本の風景描寫」

會期・前期：七月二十三日（土）から八月二十三日（日）迄  
後期：八月二十九日（土）～九月二十七日（日）迄

・国立博物館 特別展「きもの」六月三十日（火）～八月二十三日（日）

宣長は、『古事記傳』の完成に全力を傾けてをり、今さら『古今集』の注解を試みようとする意圖はなかつたとしても、宣長の『古今集』の説を知つた門弟の間から、『古今集』の注解を宣長に要望する聲が揚つたのは當然であつたらう。かくして、初學のために『古今集』の味はひを、俗語をもつてわかり易く示さうとした『古今集遠鏡』の出現をみるこゝとなつた。

注解はいかに詳しくとも、現代の自分のものとすることはむずかしいが、現代語に譯すと、直接自分がさう思つてゐるやうに、古への雅言が自分と同化したものになるので、一首の細かな情趣がはつきりとなつてしまふことが多い。

契沖の『古今餘材抄』眞淵の『古今和歌集打聽』の説に短評を加へる。横井千秋の説も細注として入つてゐる。

例言

○けりけるければ、ワイと譯す

○なりなるなれば、チャと譯す

序

大ぞらの月を見るがごとくにしにしへをあふぎて今をこひざらめやも  
○此集ヲ サテサテ結構ナ集チャト云テ 天ナ月ヲ見スゴトクニ仰ギ  
タツトシテ今此御當代ヲシタハヌト云事ハアルマイワサテ

【○千秋云、いにしへとは、後世よりいふ古にて、すなはち此延喜の御代をさせり、】

卷第二 春下

つらゆき

さくら花とくちりぬともおもはれず人のこゝろぞ風も吹きあへぬ

○オレハ櫻花ハ早ウチル物チャトモ思ハレヌ ソレヨリハ人ノ心ガサ

アダナモノチャ ナゼト云ニ 櫻ハマダ風ガフカネバ メツタニ

チリモセヌガ 人ノ心ハ風ノフクマデモマタズニ早ウ ウツル物チ

ヤワサテ 餘材、下句の注わろし、

卷第三 夏歌

題しらず

よみ人しらず

我屋どの池の藤なみ咲にけり山ほとゝぎずいつかきなかむ

○コチノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花ガ咲タワイ郭公ハイツ來テナクデアラウ

卷第四 秋歌上

みつね

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき

○コレホドニ面白イアツタラ秋ノ月夜ヲ 寐テシマウテムザムザト明  
ス人モアラウガサウシタ人マデガサ キコエヌ事ヂヤト思ハレル 餘  
材いたづらの説わろし、いたづらにねては、ねていたづらにと心得べ  
し、

卷第五 秋歌下

よみ人しらず

ほにも出ぬ山田をもるとふぢ衣いなばの露にぬれぬ日はなし

○マダ穂モデヌ山ノ田ヲトウカラ番ヲスルトテ 毎日毎日稻ノ葉ノ露  
デキルモノノヌレヌ日ト云ハナイ 百姓ト云モオノハアアナンギナモ  
ノヂヤ 此ヤウナヤウスウヲ上ニハ御存知アルマイガ 藤衣は、い  
やしき者のきもの也、

【○千秋云、こは君たる人は、ことに深く心をとめて、味ひ給ふべき  
歌也、下として、貴き人の御心ばへをも知奉り、又貴き人の、下が下  
の有さまをも、よくしろしめすべきは歌也、】

卷第六 冬歌

歌奉れとおほせられし時によみて奉れる

きのつらゆき

ゆくとしのをしくも有かなます鏡見る影さへにくれぬと思へば

○年ノツモルニシタガウテ 次第二鏡デ見ル影マデガ ツムリガ眞白  
ニナツテ面ハシワガヨツテ 此ヤウニオイクレテイクト思へバ サテ  
サテ暮テユク年ガマアヲシウ思ハルル事カナ

卷第七 賀歌

ほり川のおほいまうちぎみの四十賀九條の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

○四十二御ナリナサレタレバ 初老ト申テ老ガコウト云ヂヤガ ドウ  
ゾコヌヤウニシタイモノナレバ ソノ老メガ來ル道ヲフミマヨウヤウ  
ニ 其用意ニ櫻花ヨタントチリアウテソコラガ闇ウ曇ルヤウニセイ  
ソシタラソレデ道ガ闇ウテ來ル老ガフミマヨウテ來マイホドニ かに  
は萬葉に大き詞也、疑ひのかにはあらず

卷第九 羈旅歌

卷第十 物名

ほとゝぎす 藤原としゆき朝臣

くべきほととぎすぬれや待ちわびてなくなる聲の人をとよむる

○郭公ガ待妻ノ來ベキジセツガ過テコヌカシテ マチカネテナクアノ  
聲ガ 人ヲビツクリサセル 郭公のうへの戀の歌也、餘材わろし、打  
聞よろし、但し結句の説はわろし、

【参考】古今和歌集の序は、むかしから名文といはれてゐるが、氣魄  
の激しさの申し分のない文章である。初めての敕撰和歌集をつくる  
といふ心構に於て、千古をつらぬく氣力がこもつてゐる。

保田與重郎著『日本の文學史』